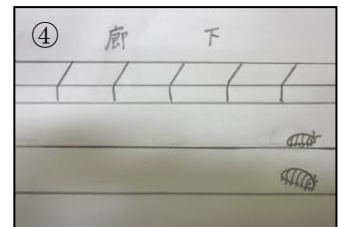
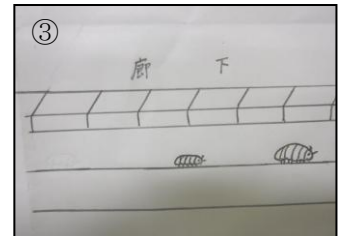
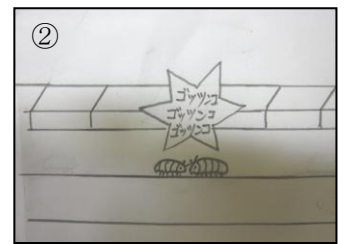
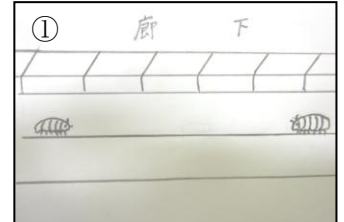




日々、子どもたちと接している中で子どもの感性の素晴らしさに感動したり、大事なことに気付かされたりすることがあります。保護者の皆様にご紹介いたします。

## 「子どもの発見に感動」 3歳児

ダンゴムシは、子どもたちが最初に親しむことができる生き物です。簡単に手にすることができ、丸くなったり、手の上を這ったりして可愛らしさもあり、子どもたちは、毎年この時期ダンゴムシ探しに夢中です。そんな6月のある日、登園してきたA児が廊下の前で立ち止まり、「あっ、ごっつんこする」とつぶやきました。A児の眼差しの先には、①廊下の段の壁に沿って右側から大きいダンゴムシが、左側から小さいダンゴムシが這ってきます。2匹ともこのまま一直線に進んで来ると正にぶつかります。A児と一緒にお母さんと私3人でダンゴムシの動きを黙って見ながら、私は「小さいダンゴムシが譲って大きなダンゴムシがそのまま真っ直ぐ進むだろう」と想像していました。そして、②二匹のダンゴムシはA児の言った通りぶつかりました。3、4回ぶつかり合って、③なんと大きなダンゴムシが向きを変え戻っていきました。その後を小さいダンゴムシが追いかけるように一直線に進んでいきました。④大きなダンゴムシは、追いつかれる瞬間にとうとう小さいダンゴムシに道を譲りました。お母さんも私と同じことを想像されていたようで、「あっ、大きい方が戻っていく」と驚かれていました。2匹のダンゴムシの短いドラマでしたが、A児の気付きがなければ大人の目には留まっていなかったでしょう。決めつけた見方ではなく子どもの発見に耳を傾け、共に観察することの大切さを改めて感じるとともに子どもの感性に感動し、この瞬間を共に過ごせたことを嬉しく思いました。



## 「子どもの思いから気付いたこと」 4歳児

ひまわり組の子どもたちに人気の絵本があります。B児がその絵本を持っているとC児、D児、E児の3人が「次は僕に貸して」「だめ、次は僕」とB児に訴えていました。B児は黙たまま、だれかに決めるということに困っている様子でした。私はどんなふう子どもたちで解決しようとするのか見守ることにしました。C児は「じゃあジャンケンで決めよう」と提案し、すぐに「最初はグー、ジャンケンポン」とジャンケンを始め、結果はC児が勝ちD児・E児は負けてしまいました。C児は「僕が勝ったから僕が一番な、Dちゃんは2番め」と言うと、今まで黙って従っていたD児が目には涙を浮かべながら「僕はジャンケンが弱いねん、だからジャンケンで決めるのは嫌やった」と訴えました。その言葉に子どもたちはハッとした様子で、私も驚きました。今まで絵本を持ったまま黙っていたB児が「分かったよ、Dちゃんが次だよ」と優しく話し、ジャンケンに勝ったC児も「いいよ、Dちゃんが先に見ても」と自分からD児に話しました。子ども同士で物の取り合いや順番決めなどでよくトラブルになりますが、すぐに「ジャンケンで決めよう」と大人は教えてしまいがちです。「だ～れが勝っても怒り無し」という言葉を付けて勝ち負けで決めるのが民主主義的であると押しつけていないでしょうか。D児が勇気を出して自分の思いを伝え、B児・C児・E児はD児の思いを知り、同じように感じ受け入れました。子ど

もたちは、このように多様な気持ちに共感する経験を積み重ねていくことで豊かな心情が育まれていきます。とてもいい場面に出会えました。

### 「カエルの餌をどうしよう」 5歳児

6月、どの学年も小動物への関心が高まり、カタツムリやカエル、カブトムシ、チョウの幼虫などを飼育するようになりました。ほし組では、カエルの餌について子どもたちの葛藤がありました。カエルは生きて虫しか食べません。図鑑で調べるとバッタも食べることが分かり早速、園庭にいるバッタを捕まえました。いざ食べさせようとする「バッタが食べられるのはかわいそう」という子どもの声があり、クラスで話し合うことにしました。「カエルだって餌がないと死んじゃう」「バッタも食べられたら死んでしまう」などの意見が出て、話し合いを更に続けると「自分たちだって動物の肉を食べてるんやで」と自分に置き換えて考える意見もあり、命をいただいて自分たちも生きていくことに気付きました。ほし組ではバッタの命も大切にしていこうとバッタの好きなものを調べ、バッタを大事に飼育しながらカエルがお腹を空かしている時にバッタを入れることになりました。担任はカエルを優先して考えるだけでなく、バッタへも思いを寄せてほしいと願い『とべバッタ』の絵本の読み聞かせをしました。視聴後の話し合いでは「バッタって食べられてばかりでかわいそう」「バッタは外にいても大変なことが多いんやな」「虫には虫の世界があるんやな」「バッタだけじゃなくて違う虫も食べるかもしれない」など様々な意見が出ました。その後、バッタをむやみに捕まえるのではなく、生き物を大切にしながら飼育する姿が見られるようになりました。その中でF児だけは「僕は絶対バッタを食べさせるのは嫌だ」とカエルの餌やりには関わりません。周りの子どもたちは、F児の思いを否定することはありません。飼育活動を通して、5歳児なりに命や生きることについて考え、自分の意見だけでなく友達の見解も聞き、多様な考えがあるということを知る経験ができたと思います。



### 「バッタって脱皮するの」 4歳児

ある日、バッタの飼育ケースを覗いていたG児が「バッタが死んでいる」と叫びました。よくよく見ると脱皮した抜け殻でしたが、「バッタって脱皮するの？」という疑問を持ち、図鑑で調べましたが書いていません。担任はその様子を見守りながら「図鑑に書いていないことを発見したってすごいね」と声を掛けました。「どこから出たのかな」「足とかがそのままや」「不思議だね」と更に関心を持ってバッタを観察するようになりました。そんなある日「バッタが立って草を食べている」「カンガルーみたい」「バッタって立つんだね」と次なる発見がありました。バッタが草を前足で掴みながら立って食べています。毎日草を変えて虫の世話をする中で、子どもたちは、バッタが草を食べやすいように草を立てて入れようとプリンカップに入れたり、根っこごと引き抜いたりするようになりました。世話をし観察することで生き物の生態を知ることができます。様々な情報がすぐに手に入る時代ですが、自分で発見したり、友達や先生に伝えたり、共に感動したりという体験を通して得た知識は、これからの学びを支えるものになるでしょう。毎日の世話を続けないと生き物は死んでしまう、飼育するということは命を継いでいく責任があることも気付いてほしいと思います。



